

東海 の 古 代

第262号 2022年6月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

大枠の把握が大切です

名古屋市 石田 泉城

『隋書』の東夷の百濟伝において、舩牟羅國の記事があります。
私は、舩牟羅國＝濟州島説ですが、ルソン島説やボルネオ島説などもあります。
この舩牟羅國は、東夷にある百濟の属国として記されています。
「東夷」とは、隋からみて東の夷（野蛮人）について記したもので、百濟は東の野蛮人の国であるという位置づけです。

そして重要な文言は、「平陳之歲，有一戰船漂至海東舩牟羅國」の記事で「舩牟羅國」の前に記された「海東」です。この「海東」とは、やはり隋からみて東の海です。

ですから、「海東」の大枠をしっかりと把握すれば、舩牟羅國は、現在もその名が示すように支那の東の海「東シナ海」にあります。

さて、フィリピンのルソン島は「海東」にあたるのでしょうか。

隋の首都は、当時の長安で、現在の西安になります。地図で西安（長安）と濟州島、ルソン島の位置を確認しましょう。この地図をご覧になれば、一目瞭然、濟州島は、舩牟羅國の位置を示す「海東」の範疇にありますが、フィリピンのルソン島は、南シナ海、つまり「海東」ではなく「海南」にありますから、舩牟羅國には該当しません。

このようにルソン島説などの仮説を立てる場合には、まず大枠をしっかりと把握することが大切です。

その上で論考を組み立てると、論理的な仮説が生まれると思います。



「舩牟羅國」の所在地（5）

瀬戸市 林 伸禧

1 はじめに

谷本茂氏は、「古田史学会報」169号（2022年4月）に『舩牟羅國＝濟州島』説への疑問と『舩牟羅國＝フィリッピン（ルソン島）』仮説を発表された。

この論考は、石田泉城*氏及び筆者が発表した「舩牟羅國＝濟州島」説を否定する論考である。

谷本論考は、石田氏及び筆者の論考を正しく理解されていないので、筆者の見解を述べる。

*1 「石田泉城」は石田敬一氏の「ペンネーム」です。

2 「^{たんむら}舂牟羅国」所在地に関する経過

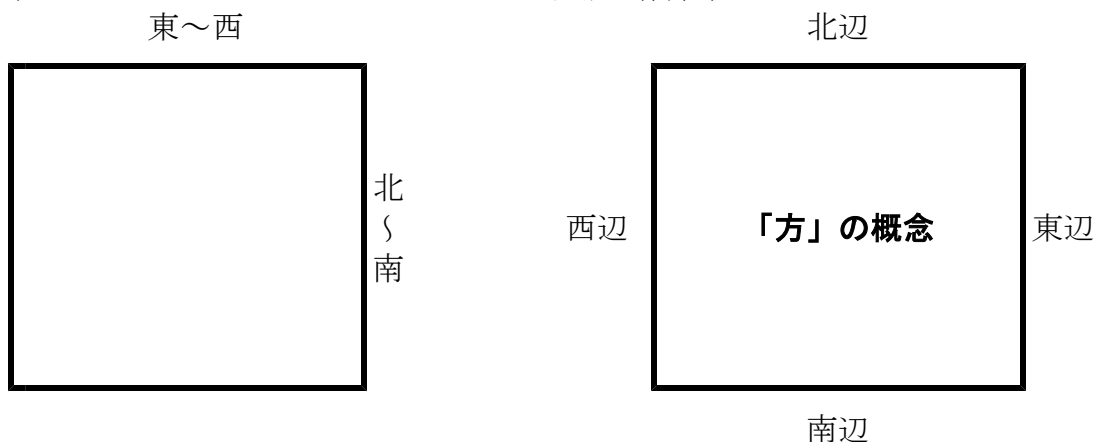
(1) 石田・西村論争

- ① 石田氏は「東京古田会ニュース」178号*1（2018年1月）に『隋書』の『舂牟羅國』について「舂牟羅國は濟州島」である論考を発表された。
- ② この論考について西村秀巳氏は、『隋書』「舂牟羅國＝濟州島石田説批判」（「東京古田会ニュース」180号、2018年5月）を発表して、石田説を批判し舂牟羅國は台湾と発表された。
- ③ 石田氏は西村氏の石田説批判について、『隋書』の「舂牟羅國」に関するご批判などについて（「東京古田会ニュース」181号、2018年7月）で反論された。
- ④ 石田・西村論争は、それ以降進展はない。
- ⑤ 筆者は、石田・西村論争に触発されて、「舂牟羅國の所在地（1～4）」（「東海の古代」217～219・224号*2、平成30年9・10・11月、平成31年4月）を発表し「舂牟羅國＝濟州島」説及び「舂牟羅國」に関する諸問題を発表した。

(2) 石田論考の古代「東西・南北」の概念

●通常

●石田説（古代）



石田氏及び筆者の「舂牟羅國＝濟州島」説の基本となる論考を、石田氏は次により発表されている。

- ① 東西五月行南北3月行について(1・2)（「東海の古代」138・140号、平成24年2・4月）
- ② 海行三月（「東海の古代」165号、平成26年5月）
- ③ 「其国境東西五月行南北3月行」の意味するところ（「多元」141号、2017年9月）
- ④ 古代の「東西」「南北」の概念（「多元」145号、2018年5月）

3 「舂牟羅國＝濟州島」説

(1) 『隋書』百濟伝の「舂牟羅國」に関する記事は次のとおりである。

平陳之歲 有一戰船漂至海東舂牟羅國 其船得還 經於百濟 昌資送之甚厚 並遣使奉表賀平陳

高祖善之 下詔曰

「百濟王既聞平陳 遠令奉表 往復至難 若逢風浪 便致傷損 百濟王心迹淳至

朕已委知 相去雖 遠事同言面 何必數遣使來相體悉

自今以後 不須年別入貢 朕亦不遣使往 王宜知之」

使者舞蹈而去

……

其南海行三月 有舂牟羅國 南北千餘里 東西數百里 土多麋鹿 附庸於百濟

（中華書局版 百納本二十四史『隋書』1819・1820頁）

*1 東京古田会ニュース：DVD（東京古田会ニュース 創刊号～200号）参照。東京古田会で発売中

*2 「東海の古代」：ホームページ「東海古代研究会」の「会報等」を参照

(2) 『隋書』百済伝の舳牟羅國に関する概要

① 北朝・隋が南朝・陳を平定した時の概況

- a これは隋の高祖（文帝）が陳国を平定して（開皇9年、589年）中国を統一したときの戦いの一つの余話（こぼれ話）である。
- b 北朝・隋と南朝・陳との国境は揚子江であった。陳との戦いにおいては、「東接滄海 海西拒巴蜀 旌旗舟楫 横亘數千里^{*1}」と揚子江に戦船を非常に多く配置していた。
- c 一隻の戦船が損傷により戦線を離脱して、海東の舳牟羅國に漂着したものである。
- d この戦船は、百済王昌から多大の便宜を得て、百済を経て隋に無事帰国した。^{*2}
- e 戦船の戦闘員等は、百済王から多大の便宜を得て帰国出来たことを高祖に報告した。

② 百済王の対応

- a 百済王昌は、舳牟羅國からの情報により北朝・隋の戦船が無事帰国できるよう指示したと思われる。
- b 百済王が多大の便宜を図った具体的な内容は記述されていないが、考え得ることは、戦船の補修、戦闘による負傷者の治療及び帰国に必要な物資の補給が考えられる。
- c 百済王は、戦船の帰国時に使者を隋に派遣して使者が陳國平定を上表して祝した。
- d 使者は、高祖が百済王に配慮した詔を聞いて喜び踊りながら退出した。

③ 隋・高祖の対応

高祖は、戦船が百済王の尽力により無事帰国出来た報告を受けて、使者に次のような詔をして、百済王に謝意を表した。

百済王は、すでに陳の平定を聞き、遠方から上表文を奉呈してきた。〔百済からの使者の〕往復は至難〔の業〕である。もし風浪に逢えば、たちまち損害をうけ賢しとであろう。

百済王の至誠の心は、朕のすでによく知るところである。〔朕と百済王とは〕はるかに遠く相隔ってはいるが、目のあたりにいるのと違いはない。どうして使者をたびたび送らなければ心中を理解しあえないなどということがあろうか。

今後は、毎年定期的に朝貢するには及ばない。朕もまた使節を〔百済に〕派遣しないこととする。〔百済〕王は、この点をよく理解せよ。

（東洋文庫264『東アジア民族史』2^{*3}、257頁）

(3) 舳牟羅國の概要

- ① 舳牟羅國は、百済の属国であって隋の東に位置し、南海行三月のところである。
- ② 舳牟羅國の大きさは、「南北千餘里、東西數千里」である。
- ③ 舳牟羅國の特記すべき事項は、「麋鹿」が棲息していることである。

4 筆者の見解

(1) 海東

- ① 戦船は揚子江河口から北上（親潮から対馬海流にのって）して隋（北朝）の海東にあたる舳牟羅國（済州島）に漂着したと思われる。「東アジア地域図」参照
- ② 南下して陳国沿岸に漂着すれば、殺害される恐れがあるので、北上したと推定する。
- ③ ルソン島（フィリピン）はベトナムの海東に当り隋の海東に当たらない。

(2) 戦船

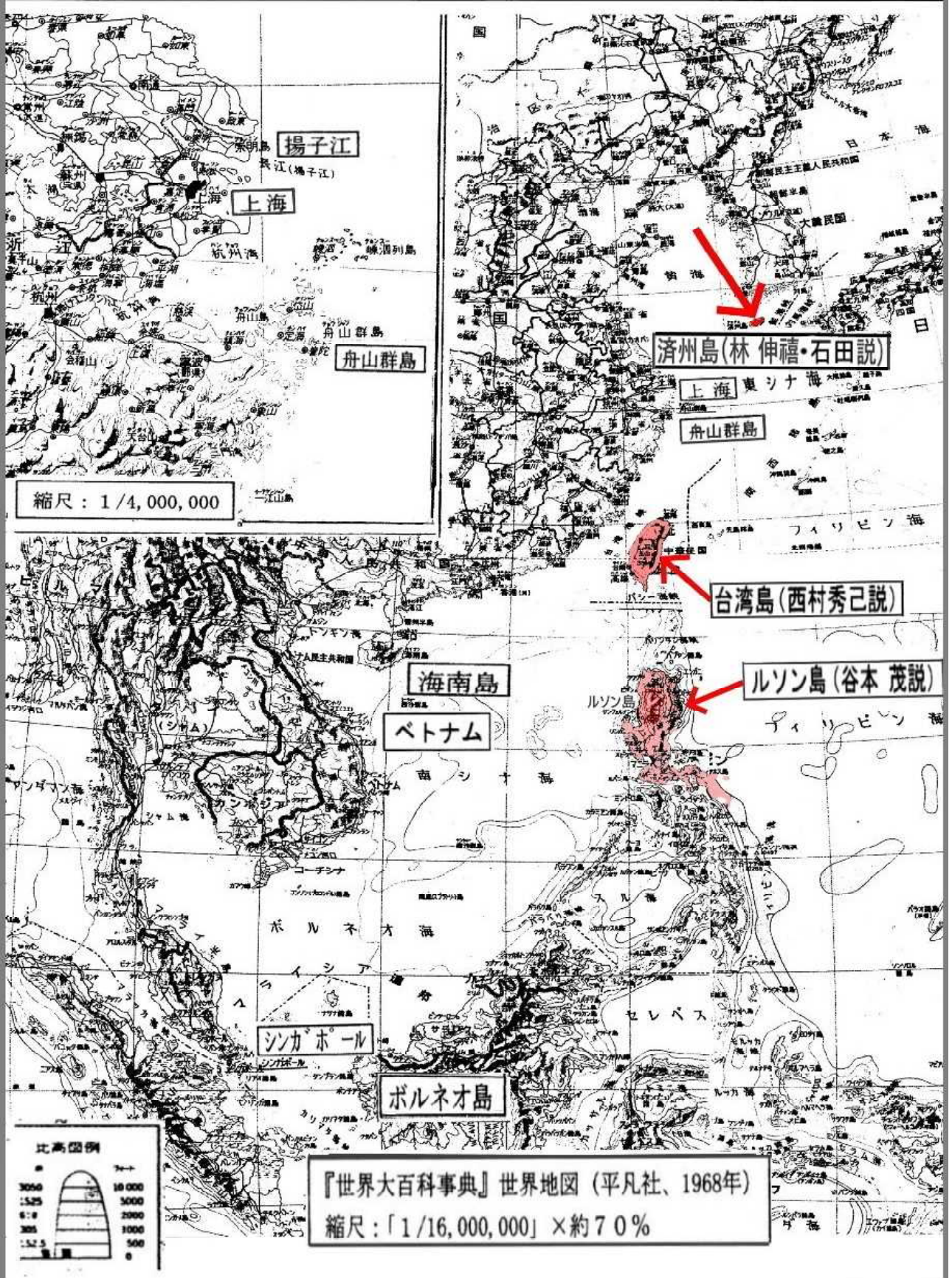
- ① 戦船の行程は「揚子江（河口）→舳牟羅國→百済国→隋国」である。
- ② 台湾島・ルソン島に漂着であれば、百済国に経る必然性はない。直接「隋」に帰国すれば良いことである。

*1 『隋書』帝紀第二・高祖下、開皇八年十二月条

*2 北朝・隋への朝貢：『三国史記』によれば、威徳王（昌）28年（581年）に隋に朝貢して「上開府儀同三司帶方郡公」の称号を得た。582年にも朝貢した。

*3 『東アジア民族史』2：東洋文庫264、井上秀雄他訳注、平凡社、昭和49年12月

東アジア地域図






(3) 舂牟羅國の大きさ

① 実数値

実数値は次のとおりである。(ウイキペディアによる。)

济州島・台湾島・ルソン島における単位距離算出表

区分	『隋書』記事 ・南北千餘里 ・東西數百里	济州島 (横長地形) 最大長：73 km 最大巾：31 km  面積：1,826 km ²	台湾島 (縦長地形) 南北：約395 km 東西：約144 km  面積：36,200 km ²	ルソン島 (縦長地形) 南北：約740 km 東西：約225 km  面積：104,688 km ²	
現代解釈	南～北：千余里	31 km → 31弱 m/里	395 km → 395 弱 m/里	740 km → 740 弱 m/里	
	東～西：數百里	二百里	73 km → 365.0 m/里	144 km → 720.0 m/里	225 km → 1,125.0 m/里
		三百里	243.3	480.0	750.0
		四百里	182.5	360.0	562.5
		五百里	146.0	288.0	450.0
石田説	南(辺)北(辺)：千余里	73 km → 73 弱 m/里	144 km → 144 弱 m/里	225 km → 225 弱 m/里	
	東(辺)西(辺)：數百里	二百里	31 km → 155.0 m/里	395 km → 1,975.0 m/里	740 km → 3,700.0 m/里
		三百里	103.3	1,316.7	2,466.7
		四百里	77.5	987.5	1,850.0
		五百里	62.0	790.0	1,480.0

※1 ルソン島：島の主要部は大体縦長地形で、その南東に長い半島がある。

島は最長部で南北の長さがおおよそ740km、東西の長さがおおよそ225km。

2 數百里の「數」は、「2・3」説と「4・5」説があるので、各々算出した。

3 長里・短里の判定基準は次のとおり。

・長里：魏時代：435m、随時代：530m

・短里：古田武彦説「75～90」であり、75mに近い値

谷本 茂説「76～77m、有効数字一桁で表現すれば、80m弱」

② 一里当りの距離 (m/里) を算出したところ「济州島・台湾島・ルソン島における単位距離算出表」のとおりである。

その結果、舂牟羅國の数値は短里で算出していることが判明した。

③ 舂牟羅國の面積

a 谷本説 (隋里≒530m) に基づいて舂牟羅國の面積を算出すると次のとおりである。

「583km×265km=154,495km²」～「900km×318km=286,200km²」

b 前項により、谷本説 (隋里) で算出した面積はどの島より過大であり、隋里での算出は誤りである。

(4) 麋鹿

① 中国では「麋」と言われた鹿が舂牟羅國に棲息していたから、わざわざ記述したものである。

② 鹿は、温帯・亜熱帯・熱帯地方に特有の品種が棲息している。

a 济州島 (温帯)：ノロジカ (ノロジカ属)

b 台湾島 (亜熱帯・熱帯)：梅花鹿 (シカ属)、キョン (ホエジカ属)

c ルソン島 (熱帯)：サンバー (ルサジカ属)

(5) 「其南海行三月」

- ① 「其南」の「其」の起点はどこか不明である。
 - a 通説では百済国の首都からとしている。百済伝の首都は「居拔城」と記述されているが、具体的な所在地は不明である。
 - b 『三国史記』によれば、百済の首都は「慰礼城→漢城→熊津→泗泚」と変遷している。
- ② 「行三月」次のいずれかに考えられるが不明である。
 - a 百済の首都泗泚から舂牟羅国までの日数。ただし、「居拔城＝泗泚」とする。
 - b 舂牟羅国から隋に帰国するときの日数
 - c 魏時代の百済の首都から舂牟羅国までの日数
- ③ 『隋書』倭国伝で、国の大きさが「東西五月行 南北三月行」と記述されており、この「三月行」とほぼ同一の距離か。

(6) その他

- ① 舂牟羅国の大きさは、短里の数値で記述されている。
- ② これは、舂牟羅国に関する原史料は魏時代のものと思われる。
- ③ 隋の周辺国の東夷・百済国の属国である舂牟羅国の情報は、魏時代に邪馬壹国に30年滞在していた張政（帯方郡の塞曹掾史）の報告書と推定する。

5 谷本論考に対する疑問点

- (1) 隋代の漂流船がどの方向に移動したのか確定的な情報が存在しない限り、一概に南の方向には移動しなかったとは断定できない。
林氏の漂流方向に関する議論はあくまでも一般論であり、東シナ海の漂流物が台湾やフィリピンの海域まで移動する可能性は充分あるといえよう。
と述べておられるが、
 - a 谷本氏はルソン島に漂着する必然性をどのように証明されるのか。
 - b 戦船は、舂牟羅国から百済を経由して帰国しているが、ルソン島からは直接、隋に帰国すれば良いことである。谷本氏は百済国を経由することについてどのように解釈されるのか。
 - c ルソン島は、南シナ海にあるが、これが百済伝で述べる海東に当る理由をお尋ねしたい。
- (2) 仮に現代の済州島の鹿の種に限って「麇鹿」と呼んでいたとしても、その歴史的な棲息域の変遷をたどり、「六～七世紀に済州島にしか棲息していなかった」と結論するには相当困難な実証作業を伴うであろう。
と述べておられるが、
筆者は、済州島に棲息している鹿は「ノロ鹿」と述べたが、済州島にしか棲息していないとは一言も述べていない。
- (3) 「麇鹿」に類似するような形態の小型鹿類が現在（古代にも）存在する。
と述べておられるが、
具体的にはどのような鹿であるのか名称を示されたい。
- (4) 仮にその仮説に立つ場合は、①「海行三月行」は百済～済州島の行程としては過大であり、適合しない。「海行三日」とでも考えない限り実勢地理に合わない。
と述べておられるが、
編者の魏徴が何らかの資料に基づいて記述したものと理解しており、想定されるのは、魏時代の史料と思われる。
- (5) 谷本氏のルソン島説について
『隋書』百済伝以外にルソン島が百済国の属国である文献を御教示していただきたい。

多利思北孤はなんと呼ばれていたのか

一宮市 畑田 寿一

『隋書』に記述されている「多利思北孤」については、これを日本語読みして由来を解説する試みがなされているが、基本的な間違いを犯している。これが日本語で書かれていたとしても現在の発音ではなく、中国語であれば全く見当違いの検討を行っていると言わざるを得ない。今回は最近の古代言語の研究成果を利用して従来とは違った観点から謎に迫ってみたい。

1 多利思北孤は日本語か

通説では国書の差出人の名前として「多利思北孤」と書かれており、日本語としている。確かに「タラシ」は仲哀、舒明天皇の和風諡号に表れ、「アメノ」は欽明天皇に使われている。しかし、隋書では「號」や奥さん、息子の名前と共に書かれており、中国の記録係が日本側に尋ねた結果と考えた方が妥当であろう。

国書の書き方を指導したと思われる高句麗僧恵慈は国書の書き方を知らず、国書には差出人が書かれていなかったか、豊聡耳命と記されていた。文面を見る限り挨拶文程度の書き出しであり、威厳と歴史を持った国書とは思えない。

2 記述された文字の分析

倭王姓阿每字多利思北孤號阿輩雞彌遣使詣闕
王妻號雞彌 後宮有女六七百人 名太子為利歌彌多弗利
倭王遣小德阿輩臺 ・ ・ 大禮哥多毗從二百餘騎郊勞

(1) 姓「阿每」

上記を前提とすると、書かれている文字は中国側が聞き取った言葉を漢字に当て嵌めたものとなる。中国語では「阿A」は「Aさん」の意味になるが、「每」は「メイ」であり、「メイさん」とは何か問題になる。

「阿輩」は同様に「皆さん」の意味になるが、単人称の場合には親しみを込めた言葉になると思われる。

(2) 號「雞彌」

ここで問題になるのは「雞彌」であるが、王の妻と同じ號がついている。

「彌(ミ)」は修飾文字で意味を持たず、「雞(ジ)」は「鶏」と同義語であろう。中国では鶏はあまり良い意味を持たず、雄鶏は「小心者」、雌鶏は「売春婦」の裏意味を持っており、ここでは中国特有の蔑んだ意味を持たせている。では「ジ」とは何かを前出の「メイ」と併せて考えると

「メイ」＝「命」、「ジ」＝「豊聰(耳)、(上)宮」

が浮かぶ。すこし強引に思えるが、後の多利思北孤の論議を併せると妥当性がみえてくる。なお、「厩戸(ジュフ)」も可能性がある。天寿国繡帳では太子を「等巳刀禰禰乃禰己等(トヨトミニノミコト)」と呼んでいるので「豊聰(耳)」が最も可能性が高い。

(3) 利歌彌多弗利

この字句は難解で、定説はお手上げになっている。

しかし、唐代の翰苑には「利哥禰多弗利」と記されており、「歌」を「哥(ゲ)＝兄」の間違いとすると(「利哥」＝賢い兄)の意味になり、「賢い兄の多弗利(タフリ)」となる。一方、田村皇子は神功紀9年に「荷持田村」を(ノトリタノフレ)と読ませている記事があり、(タフレ)が最も音が近い。ちなみに「田村」は中国語では(ティエン ツェン)であり、日本側が漢字を示した訳ではない。

ただし、田村皇子(後の舒明天皇)は593年生まれであり、年齢的に皇太子とは言えないが、日本の使者は将来の希望も含めて、田村皇子の名を挙げたのでは無からうか。

(4) 小徳阿輩臺

小徳は推古11年(604年)に定められた冠位であり、上から2番目にあたる。

阿輩は前述の「皆さん」であり、「臺」が人物を特定するカギになるが、『日本書紀』に

登場する「額田部連比羅夫」、「阿倍鳥臣」、「物部依網連抱」のいずれも充てるのが難しい。「河内糠手」、「難波吉士雄成」を想定する説もあるが、根拠が明らかでない。結局、「小徳将軍を始め、高台に並んで我らを迎えた皆さん」程度が妥当であろう。

(5) 多利思北孤

多	ta	た
利	li, lji	り、い
思	si, sia	し、シァ
北	pak	ぱク、ぴ
(比)	bi, pii	び、び
孤	kou, ku	くオ、く

- ① 「利」の読み方に注目すると、「イ」に近い発音がみられる。「タイシ」と読めないか。
- ② 残る「北孤」は「パク」または「ビク」であり、「彦」が最も近い。
以上から、「多利思北孤」は「太子彦」とすると、「才徳の優れた太子」の意味になる。

3 和訓の使用時期

漢字を訓で表す時期については諸説あるが、今回の関係分に絞ってみると

- ① 「命」を「みこと」と読む事例は、『日本書紀』には天皇の名前として存在するが、編集時の記述の可能性が高い。『万葉集』第1巻の柿本人麻呂が詠んだとされている「**日雙斯 皇子命乃**・・・」が唯一の事例であり、大王、皇子、命などが使われていた。
- ② 『古事記』に表されている童歌を眺めると、古くは1語1音が原則であるが、清寧天皇(480年)ごろからこの原則が崩れる。

以上のことから、聖徳太子の時代には固有名詞については限定的に和訓が使われていたと考えられる。現在の様に和訓が幅広く使われるのは8世紀ごろであるので、適用の場合には類似の事例を探すなど検証が必要であろう。

4 まとめ

従来、中古代の中国語の発音の研究は進んでいなかったが、最近になり台湾大学中央研究院から「漢字古今音資料庫」が提供され、国内の「学研漢和大字典」(藤堂明保編)との対比により検討の幅が広がった。今回発表の内容もその恩恵の賜物であるが、若干、強引な解釈との誹りは免れない。

隋代の日本列島には2つの勢力が存在した。『隋書』倭国伝では明確な記述は無いが、前回の論考でもその可能性は述べたとおりである。600年の遣隋使は倭国(九州)から派遣され、607年は倭国と倭国(ヤマト)の合同で朝貢に臨んだと考えられる。

裴世清は九州までは確実に来た。しかし、「ヤマトまで足を延ばしたか。」については内容があまりにもよく出来過ぎており、『日本書紀』の脚色説を否定できない。裴世清がヤマトまで足を延ばし、聖徳太子や蘇我馬子と直接面談していれば、もう少し正しい情報が伝わったとも考えられる。

推古16年(608年)に小野妹子が隋では「蘇因子」と呼ばれていたとする記事が書かれている。「蘇」の文字や音から小野妹子を蘇我馬子とする説が根強いが、時の権力者が1年以上日本を離れることや、55歳を超える年齢は長旅には耐えられないので、この説は成り立たない。「小野妹子」は当時の中国語で「シェオメイジ」となり、「蘇因高(スオイエンカウ)」ともかみ合わないので小野妹子が自己紹介した言葉(シヨウ+イモコ)からの連想では無かろうか。

前回の例会の話題

- ・『隋書』東夷伝を読み直す 一宮市 畑田寿一
- ・『隋書』の倭と倭 名古屋市 石田泉城
- ・秦王國とは 東海市 大島秀雄
- ・「海岸」は難波津か 名古屋市 石田泉城
(投稿テーマ)セミナー聖徳太子関連ほか

例会の予定

- 例会の予定 次回は総会を開催します!
- 1 日時 6月25日(土)13時半～
- 2 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会
7/17(日), 8/13(土), 9/17(土), 10/15(土)
- 投稿締切り日 6月30日(木)